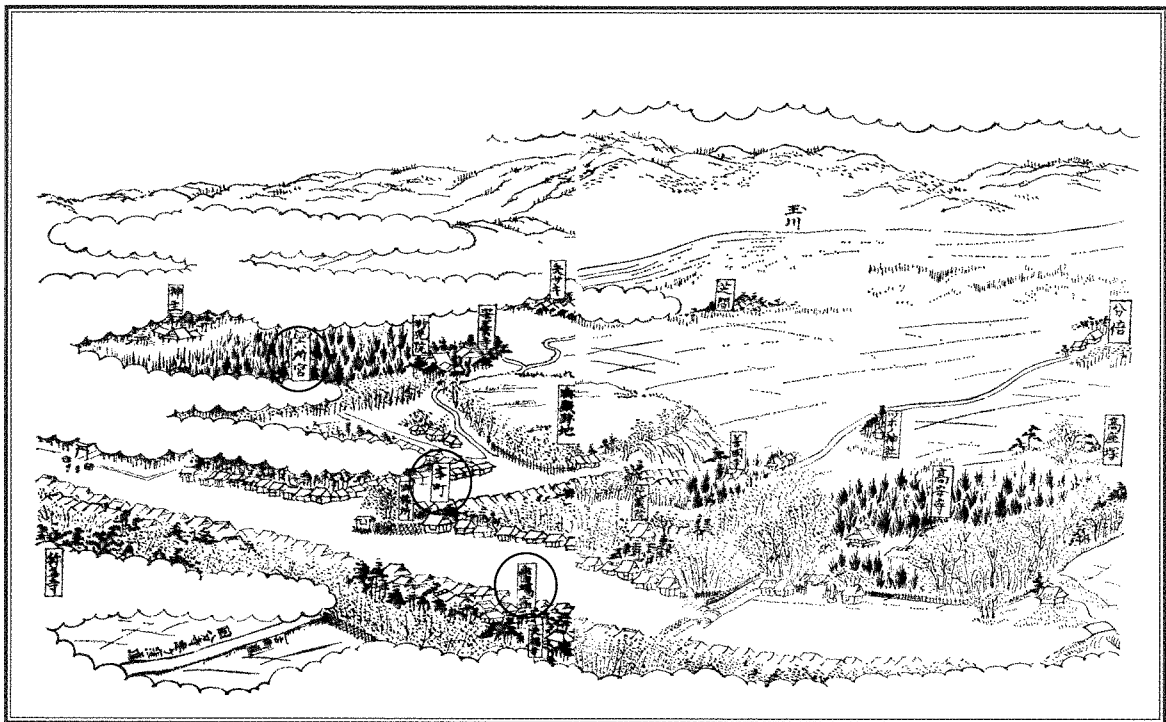


あるむぜお92

府中市郷土の森博物館だより

a/museo NO. 92

2010年 6月20日



『武蔵名勝図会』多磨郡之部 卷三 府中宿
出典：『武蔵名勝図会』（1993年 慶友社）

目次

- 1-2 府中宿に○△がやってきた！
 - ①浪人・山伏・座頭・虚無僧
- 3 展示会案内
 - 特別展 見て、触れて、探してみよう！身近な昆虫の世界
- 4 企画展 蓮の画帳
- 5 最近の発掘調査
 - 武蔵国衙跡から「國」の墨書土器が出土
- 6-7 ノート 府中御殿
- 8 博物館で生物多様性を知る！ ①生物多様性って何？
- 9 平成21年度資料受入、利用状況報告
- 10 収蔵資料あれこれ 一軒に複数の稻荷さま

府中宿は、本町・番場宿・新宿の三町（行政的には三村）で構成されています。上の図は、南を上描かれており、下部を横に通っている広い道が甲州街道です。この図中には本町と番場宿しか示されていませんが、甲州街道沿いの東側に新宿があります。図の東（左手）には六所宮（現大國魂神社）も描かれています。

宿場は、交通の要衝であり、公用のための人馬や宿泊施設を用意することが役割として課せられていました。また、一般の旅人などからも賃金を貰って、人馬や宿泊場所を提供していました。

府中宿に〇△が やってきました!

①浪人・山伏・座頭・虚無僧

地域を中心である江戸時代の宿場には、多くの人や物資、情報が集まりました。府中宿にも物見遊山や商用、六所宮（現大國魂神社）への参詣などさまざまな目的をもった人が訪れました。種々の人々が集まれば当然のことながら、中にはあまり歓迎できない面々も含まれていました。どのような人々が訪れ、府中宿ではどのように対処していたのか、4回シリーズで紹介したいと思います。

「合力」とは、金銭や物資を与えて助けることをいいます。江戸時代には、各地で合力を受けながら、遊行、流浪する人々がいました。

右上の表は、文政3年（1820）2月から翌4年1月にかけて、府中宿の東に位置する八幡宿村が支払った合力金の一覧です。合力を受けた者をみると、浪人が最も多く26名で344文、警女が4名で8文、座頭・山伏が1名ずつで、それぞれ16文、24文となっています。八幡宿村でこの状況ですから、人と物の交流点であった府中宿では、さらに多くの合力金を支払っていたと考えられます。

警女は門付け（三味線を弾き歌謡を唄い金品を貰う）をしながら巡る盲目の女性で、座頭は当道座（盲目の男性の互助組織）に属し、三曲や鍼灸などを行う者です。虚無僧や山伏（修験者）は、宗教的背景の下に托鉢を行う人々です。前二者はその芸や技術に対する謝礼として、後二者はお布施として合力を受けていました。これは、双方の合意の下に行うもので、それ自体に問題はありませぬ。ところが、これらの者の中には、無理強いや暴力により合力を得ようとする者もいました。

このため、幕府は浪人については明和6年（1769）に、「旅僧・修験・警女・座頭」の類、「虚無僧」体の者については安永3年（1774）に、合力金をねだる者がいたら、召し捕えるようにと

八幡宿村における合力金一覧

月	日	願い主	要望	合力金
2	28	御本丸浪人	泊まり願	32文
3	10	紀州浪人2人	泊まり願	48文
	18	甲府浪人2人	合力願	24文
	27	紀州浪人	合力願	12文
4	2	府内浪人	合力願	12文
	16	相州小田原浪人	合力願	12文
	20	下谷三味線堀佐竹様浪人3人	合力願	24文
5	14	警女4人		8文
	16	座頭	昼食願	16文
6	22	江戸浪人		12文
	24	江戸本郷2丁目浪人		12文
7	6	浪人2人		40文
	24	江戸浪人3人	合力願	24文
9	20	浪人	昼食願	12文
10	27	江戸浪人3人	合力願	24文
11	20	御本丸浪人	泊まり願	16文
12	2	江戸浪人	昼食願	12文
1	5	江戸浪人	合力願	16文
	7	小田原宿山伏	泊まり願	24文
	?	浪人		12文

当館寄託資料「八幡宿田中家文書」より作成

いう触書を出しました。浪人には合力自体を禁止していますが、それ以外には強いて合力をねだる行為を処罰の対象としています。

八幡宿村では、浪人にも合力金を出していますから、法令の効果はあまりなかったのかもしれませんが。多くの合力金を支払うことは、村々の負担となるため、江戸時代後期になると、複数の村が連合して、これらの者への対応にあたるようになりました。

文政4年に府中領38か村は、府中宿と布田五宿（現調布市）のみが1人につき鑑銭12文の合力金を出すことにし、その他の村々は1年に銭100文を両宿に渡すことが取り決められています。

また、府中宿は加わっていませんが、押立村（現府中市押立町）他10か村では、合力金はやむを得ない場合にのみ1村4文ずつとし、宿泊を願う者は最寄の宿場に送るという議定を、文化7年（1810）に結んでいます。最寄の宿場ということは、府中宿にも送られてきたにちがいません。

文化2年に関東取締出役が置かれ、文政10年に組合村が定められると、治安などに関することは、組合村単位で動くこととなりますが、それ以前から複数の村で浪人など合力の対処にあっていたことがわかります。その際、府中宿は地域の核として、中心的な役割を果たしていたのです。

（花木知子）

展示会案内

特別展 あしもとネイチャーワールド

見て、触れて、探してみよう！身近な昆虫の世界

7月17日（土）～9月5日（日）

会場：本館1階特別展示室

昆虫たちは、昔から人の生活に関わってきました。農家と昆虫の関係では、作物の花粉を媒介して結実の一助を担う益虫、育った作物を食い荒らす害虫と、立場こそ異なりますが、切っても切れない縁であることには他なりません。しかしながら、一般的に人と昆虫が密に触れ合ってきたのは、何と言っても昆虫採集や昆虫飼育に代表される趣味の領域だと思えます。

府中にはかつて多摩川特有のカワラエンマコオロギがいました。水辺にはオオキトンボがいました。……今では絶滅しています。

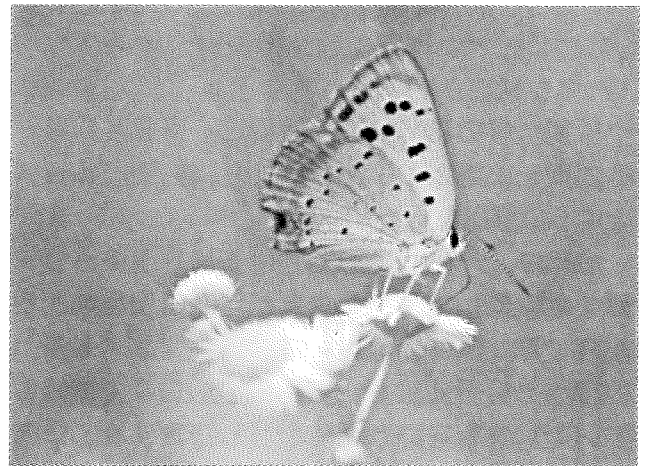
雑木林にはカブトムシやクワガタムシが多く集まり、昆虫採集には打って付けの場所が豊富にありました。田畑にはモンシロチョウをはじめとす



シオカラトンボ © 藤井醇

る蝶の仲間や、様々な虫たちが翔んでいました。

夏休みの定番とも位置付けされるほど、ひと昔前の子供たちの興味は昆虫採集に向いていました。大人も一緒になって森や林を駆け巡ったものです。今はどうでしょう？都市化が進み東京の自然が失われつつある現状で、ついつい足元の自然には無関心になりがちです。実際に捕虫網を持って歩く子どもたちの姿を見かける機会も減りました。し



ベニシジミ © 藤井醇

かしながら……。

昆虫は世界中至る所に生活拠点をもち、様々な気候・環境条件に適応しています。その数約100万種と言われ、生物種の内のおよそ大半が昆虫と言っても過言ではありません。ゆえに、都市化が進んだ街中にあっても多様な昆虫が色々な場所に息づいているのです。特に府中市域には、多摩川をはじめ自然の残るエリアが豊富に見られ、増減こそありますが、昆虫にとっては良好な条件がまだまだ整っています。当博物館の園内にも、雑木林や池に代表される同様の環境条件があり、こうした場所を目指して多数の昆虫が入り込んで来るのです。

そんな身近に触れることの出来る昆虫に目を向けて見ませんか？展示では府中の昆虫、日本の蝶、博物館園内の観察スポット、美しい昆虫の世界を紹介します。標本をじっくり見たら、実際に本物を探しに出掛けてみませんか？昔に戻って捕虫網を振り回すのも一興かも知れません。そんな夏休みの昆虫体験に一役買えるような展示会を開催します。
(中村武史)

企画展 蓮の画帳

～百蓮譜～

7月3日(土)～9月5日(日)

会場：本館2階企画展示室
観覧無料

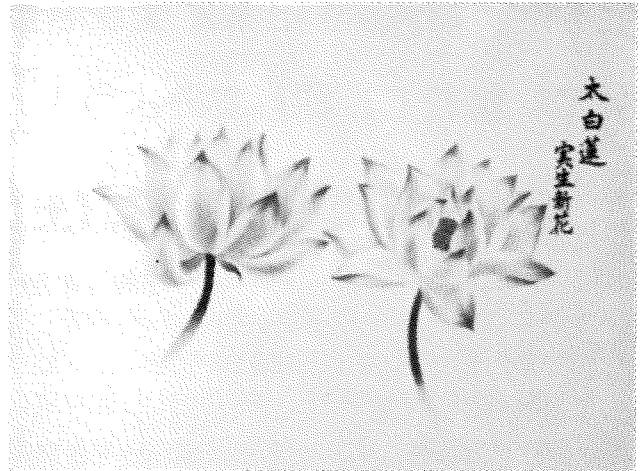
毎年ハスの花が美しい時期に、当館が所蔵する大賀一郎博士の遺品から、ハスに関する資料を中心に展示を行っています。

今年は、ハスの色彩画「百蓮譜」を中心に、博士が収集したハスをかたどった日用品などを紹介します。「百蓮譜」には、「寛政の改革」を行った松平定信が、下屋敷の浴恩園で栽培していたハスを描いた図譜の写しが含まれています。この図譜は「浴恩園蓮譜」「白河侯蓮譜」などと呼ばれています。

松平定信といえば、質素儉約を励行した政策



蓮と大賀一郎博士



「百蓮譜」のうち「太白蓮」

から、真面目で堅実な人物であるという印象が強いように思います。そのため、36歳で老中職を辞した定信が、政治活動から一線を画し、文学や芸事に打ち込んだ風流な生活を送ったことは、意外に知られていないかもしれません。

現在の築地中央卸売市場の一带にあった浴恩園の広大な庭園で、定信は桜やハスなど様々な園芸植物の収集を行い、それらを谷文晁等の絵師に写させました。そのうちの1つが、「浴恩園蓮譜」で、成立は文政5年(1822)頃と考えられています。残念ながら浴恩園は、文政12年の大火で焼失してしまいましたが、これらの図譜により、庭園で収集、栽培されていた植物を知ることができます。

この「浴恩園蓮譜」を一部写したとされる「百蓮譜」は、全部で99枚あり、このうちの68枚に「浴恩園蓮譜」というメモ書が付されていたとされます。これが大賀一郎博士の手元に渡った経緯はあきらかではありませんが、この他にも「蓮花百種」「秩入蓮花図」というハスを描いた図譜が、大賀博士の遺品として残っています。

研究生活の多くをハスに捧げた博士が収集したハスにまつわる資料からは、博士のハスに対する愛情が感じられます。府中でハスとともに晩年を過ごした大賀博士の軌跡とともに、江戸時代より松平定信をはじめとして、多くの人に好まれたハスの画を堪能していただきたいと思います。

(花木知子)

最近の発掘調査

武蔵国衙跡から

「國」の墨書土器が出土

宮町三丁目 府中市文化振興課文化財係 野田 憲一郎



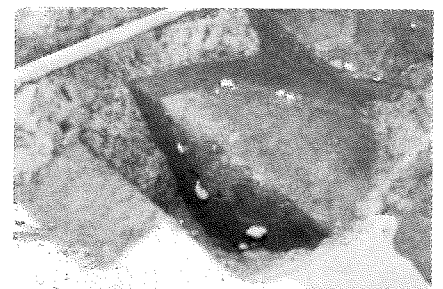
昨年7月、大國魂神社の境内とその東側の道路、そして史跡整備をした武蔵国衙跡地区が「武蔵国府跡」として国の史跡に指定されました。今年2月から、大國魂神社の境内で発掘調査を実施したところ、「國」という文字が墨で書かれた土器が発見されました。

この墨書土器が出土した場所は、大國魂神社拜殿の東方にあたります。武蔵国衙地区として史跡整備したところから見ると、約100m南の地点で、役所の建物が建ち並ぶ武蔵国衙の区画内に入ります。

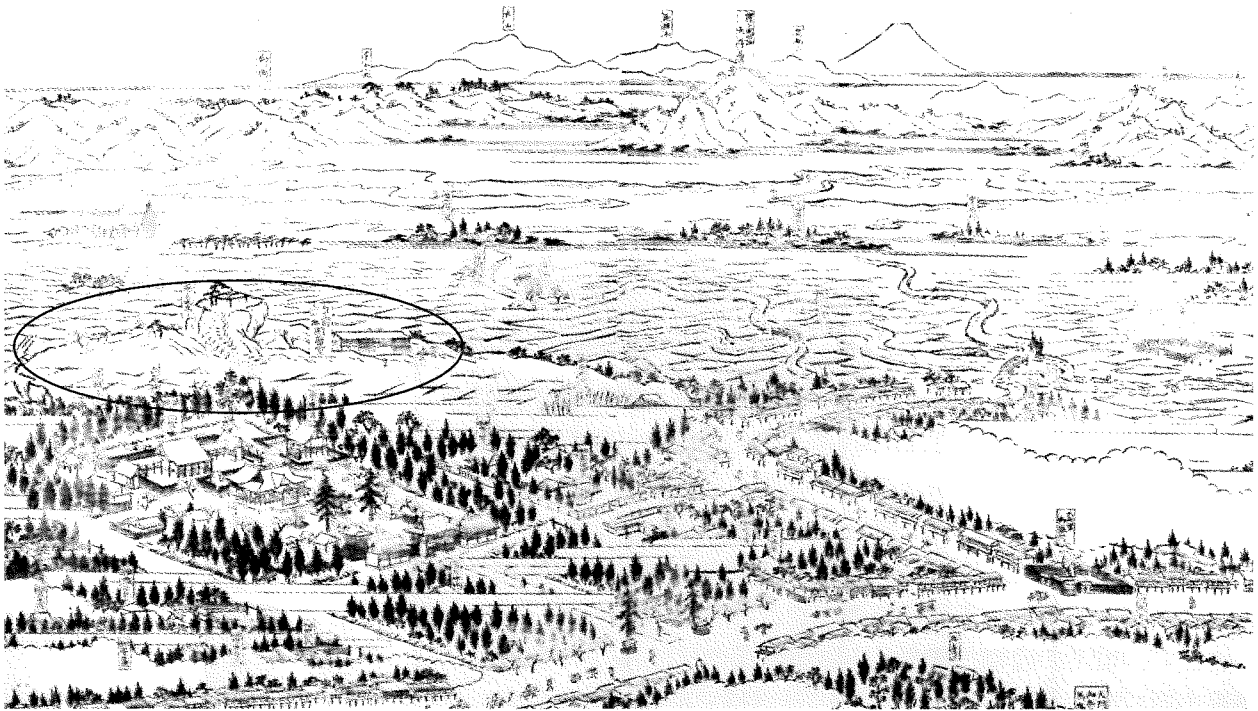
墨書土器が出土した遺構は、断面の形が掘り鉢状になる土坑状の遺構で、上面の形は楕円形で長径が約3.2m、深さが約1.8mの規模でした。深さ約1.2mのところ幅約20cmほどの段を有することから、氷を貯蔵しておく氷室と考えられている遺構に似ていますが、底面は関東ローム層の下の砂礫層にまで達しておらず、氷が溶けた水を地下へ浸透させる機能は無いため、今のところ氷室とは異なる目的で造られたと考えています。

墨書土器は、この遺構の埋め土の上層から出土しました。全部で3点見つかり、須恵器の坏と埴の外面に「國」の一文字が記されています。墨書土器とは、土師器や須恵器の表面に文字が墨書きされているものです。文字の意味はまちまちで、地名、人名、場所、数量、吉祥句、年月日といったものがよく知られています。府中市内ではこれまでに多くの墨書土器が出土していて、「大目館」「南曹」「大館」といった施設名や、「牧万呂」「文刀自女」などの人名の墨書土器も確認されています。今回出土した「國」については、出土した場所が国衙の区画内であることから、国衙や国府など、役所の施設を示す文字として記されたと考えてよいのではないのでしょうか。

墨書土器が出土した謎の遺構については、近年の調査で類例が少しずつ増えてきていますので、その用途が解明されれば、ここで出土した「國」墨書土器の本来の意味が、一層明らかになるかもしれません。



墨書土器が見つかった土坑



『武蔵府中国府台勝概一覽図』

観光スポットになっていた御殿跡。一番眺めの良い所に聚遠亭という休憩所もできている。

▼府中御殿御旧跡

JR府中本町駅の東側で昨年から大規模な発掘調査が行われているのを御存知でしょうか。10年ほど前まで製粉工場だった所ですが、ここはちょうど台地が突き出ている場所です。今でも眼前の駅舎をはずして見れば、大変眺めのいい場所だということが分かる筈です。

たぶん40~50年前までなら、眼下には豊かな水田と多摩川、対岸の多摩丘陵、遠くには大山、箱根から富士山、奥武蔵・秩父の山々と連なるパノラマが広がっていたでしょう。ちょうど写真の『武蔵府中国府台勝概一覽図』のように。勝概とは勝景のこと、「武蔵の国府台からの絶景一望」がこの題というわけです。○印が発掘調査中の場所です。

『武蔵府中国府台勝概一覽図』は幕末から明治の初め頃に刷られた絵図ですが、ここには国府台と書かれ「府中御殿御旧跡」と注記されています。この台地の下、現在の本町2丁目辺は

「御殿下」という小字名でしたが、それはこの「府中御殿」に由来していたのです。

近世史で「御殿」という時、ふつうは江戸時代初期に将軍が鷹狩や川狩の時、あるいは上洛の途次の宿泊施設として造らせた建物のことで、規模の小さいものは「御茶屋」と呼ばれたと説明されます。確かに御殿・御茶屋の事例は徳川幕府による造営が多く知られ、関東地方で30以上に及びます。

▼府中御殿造営のいきさつ

府中御殿の造営について伝える史料のほとんどは江戸時代中・後期に編纂された『武徳編年集成』『武蔵名勝図会』『新編武蔵風土記稿』などで、天正18年(1590)8月としています。7月20日付の作事(建築)申付の文書があったと、大久野村(現日の出町)の番匠(大工)の家に伝わるとも書かれています。

今回調べた限りでは、家康は三河時代に現磐田市の中泉御殿を造らせていますが、関東への

移封が決まって最初に造営を指示した御殿がここの府中と川越でした。

それまで関東は後北条氏の領国であり、豊臣秀吉は天正18年3月に小田原攻めに踏み切り関東へ進軍します。後北条氏の支城は次々に落ち、ついに7月初め小田原開城に到りました。そして、この間に秀吉は家康に対し東海から関東への転封を命じ、江戸を拠点とするよう勧めたといえます。

家康の8月1日（八朔）江戸入城説は広く信じられていますが、史実として秀吉と家康が7月18か19日に江戸城にいる事が確かめられており、後の創作説が優勢になってきています。

その後秀吉は奥州に向かい、8月初めに会津でいわゆる奥州仕置を発令して天下統一をはたします。家康が、秀吉の帰路の宿泊施設として、川越と府中の御殿工事を急がせた『武蔵名勝図会』にはあります。

そして秀吉の川越御殿滞在に際しては、家康から饗応の命令があったとされますが、府中滞在中には触れていません。しかし、川越→田村（平塚市）→小田原というルートを見ると、府中に立寄った可能性も否定はできません。この時期、世の中はのんびり鷹狩りなどしている状況ではありません。府中御殿造営の第一の目的は秀吉滞在中の為だったと思われる。

川越御殿は地元で伝承がなく、川越城を指すのかも知れませんが、7月に出来た「川越破却」の城取壊しの命令と矛盾するなど問題がありますので、今回は疑問を呈するに留めます。

▼御殿の使用と焼失

翌天正19年正月、また奥州で事件が起き、羽柴秀次が清洲から府中へ出張り、御殿に滞在中でした。この時には家康も江戸から来て会見したといえます。これは同時代の史料『家忠日記』にも載る確実な記録といえます。

その後関ヶ原の合戦を経て、慶長8年（1603）江戸幕府を開き、勝利を確信した家康は2年後に將軍職を秀忠に譲り、駿府に移ります。これからが彼の大御所鷹狩り時代で、方々に出かけています。家康は、これは鷹狩りに名を借りた民情視察なのだと言ったとも伝わります。各地でこの時期に造営された御殿が多いのもうなずけます。

府中御殿には慶長13年9月と16年11月の滞在記録があります。内、13年の折は、江戸から秀忠も来て対面しました。慶長15年7月には秀忠のみが納涼・川狩りに訪れています。

そして印象に残るのが家康の死から1年後、元和3年（1617）3月、遺骸を久能山から日光へ改葬した時です。霊柩を輿に乗せた葬列は東海道を小田原から北上し、平塚の中原御殿を経て府中へ到ります。史料によって異なりますが、1泊か2泊して法要もし、川越へ向かいました。

3代將軍家光も2度府中御殿に来たとする書物もありますが、根拠が薄弱です。

これらの御殿使用時には近隣の住民たちは、食料であれ、人手であれ、何らかの形で負担を求められたに違いありませんが、そのエリアが「府中領」の原形だと指摘する研究もあります。他所の例から見ても、御殿運営に関わって、近くに代官陣屋が設けられたと推測しています。

また、先の番匠の文書には元和7年と寛永17年（1640）に作事とあるので、この頃までは使用を想定していたのでしょうか。しかし、正保3年（1646）10月本町で大火事があり、武蔵国一の社領石高を誇る六所宮（大國魂神社）の社殿もろとも、府中御殿も灰になりました。

神社はしばらくすると幕府の肝いりで再建されますが、御殿の方はおよそ80年後に、地元の有力者が冥加金を払って開発を願い出て畑にするまで、原野のままに放置されました。

▼国府と御殿

府中は国府のあった所だから家康が御殿を造らせた『武蔵名勝図会』に書かれています。また延享4年（1747）に著され、地元でかなり流布した『府中故事』で、作者依田伊織は御殿の場所を国造の居城跡だとしています。現在の歴史研究における国造とは認識が異なりますが、ここに古代の支配層の住居を想定したことは、発掘調査でにわかに具体性を帯びてきました。

先ごろ行われた現場説明会によれば、国府の中心的な建物にも匹敵する大きな古代の柱穴、また、中世のしっかりした堀跡など、御殿に先行する時代の遺構も見つかっています。1か所に各時代の重要な遺構が集中しているこの遺跡は、府中という町の歴史を象徴する場所として、大切に残していきたい遺跡です。

博物館で生物多様性を知る！



①生物多様性って何？



人間は自然の中に暮らしています。自然界には同時に様々な生物が棲んでいます。人間も他の生物も互いに関わり合って生活しています。それは複雑なパズルの各ピースが見事に接合して1枚の絵を描くような関係です。ひとつひとつのピースが生物多様性と呼ばれ、完成した絵が生態系そのものだと言えるでしょう。

約40億年をかけて生物は様々な進化を遂げ、現在の地球上には1千万から3千万種が存在すると考えられています。多様な生物は色々な環境にそれぞれ適応して生息しますが、森林・草原・里山・河川・海洋など生活基盤となる空間そのものも、地域や気候が干差万別な点で多様性の一環と考えられています。さらに生息地域が違えば同種の生物でも遺伝的に異なる個体が生じるケースもあり、これも多様性と捉えられています。

多様な動植物は漠然と生活しているのではなく、植物を草食動物が食べ、草食動物を肉食動物が食べるという関係を各環境単位で成立させながら、食物連鎖のバランスを維持することで繋がっています。生物が1種でも欠けること、環境がわずかでも変化することは、結果として多様性から成る生態系に影響を及ぼすことになり、自然の恩恵を受ける人間にも打撃を与えてしまいます。

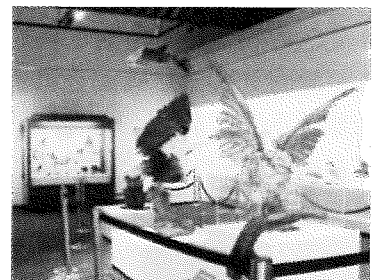
今秋に名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議が開催されます。これは1992年にブラジルで開催された「環境と開発に関する国際連合会議」、いわゆる地球サミットで採択されたもので、生物多様性の保全と、生物資源の持続可能な利用に関する内容です。今回はこれまでの活動検証と新たな目標設定が主要議題で、これに合わせ国連は今年2010年を国際生物多様性年と決めました。最近話題になったクロマグロの問題しかり、全世界的に絶滅危惧種は増加の傾向を示し、すでに自然界のバランス

は崩壊しつつあるという危機感が浸透しています。生物の生活基盤である環境保全の重要性も問われている現状です。人間がこれを再認識して、生態系を守ることを今一度再考しようというメッセージが多様性年の主旨だと思っております。

博物館におけるテーマも実はこの多様性に他なりません。生物学は生物体の共通性を追求する解剖学（医学）系分野と、生物の多様性への興味から出発した博物学（分類学）系分野に大別されます。有名なダーウィンの進化論は、野外観察から種の多様性を考察した後者の代表的な説です。

博物館は収集した数多くの標本類を分類・保管・展示することで生物の多様性を追求する博物学を扱っていることになります。これを基礎に、ひとつの環境に生活する動植物の生態も考察します。ジオラマ展示などは、これだけの生物がこんな場所にこんな風に生きていますということ伝えるための代表例です。また、実際に野外に出向き、自然観察を体験する機会を設け、生の多様性の紹介もします。府中のように都市化が進む地域では、環境が常に変わることで多様性も著しく変化するので、常に新しい情報を収集して事業に反映させています。展示や観察会、講座を通じて地域の生物多様性の現状を多くの人に伝えること、つまり日頃の博物館活動こそが生物多様性年に関わる一端と位置付けても間違いはないでしょう。本シリーズでは、そんな実例をいくつか紹介していきたいと思っております。

(中村武史)



展示や野外講座は多様性を学ぶ博物館（自然系）事業の代表例
左：自然観察会風景 右：企画展「多摩川中流域の野鳥」

平成21年度
寄贈・寄託資料一覧

No.	寄贈・寄託者	資料名	分類	数量	受入
1	紺野英二	八幡神社境内採集品 高安寺境内採集品	考古	一括 一括	寄贈
2	大野忠一	磚(万里長城採集)	考古	1点	寄贈
3	大室容一	郡名瓦 他	考古	一括	寄贈
4	横山 節	西府町1丁目採集品等	考古	一括	寄贈
5	本田栄一	黒電話 和文タイプライター	民俗	2点 1点	寄贈
6	森田光雄	砂利箕 鯉織かご	民俗	2点 1点	寄贈
7	林 繁	念仏講御詠歌資料 卓袱台	民俗	一括 1点	寄贈
8	坂本長利	「土佐源氏」関係資料	民俗	一括	寄贈
9	八幡神社氏子会	子供神輿	民俗	1点	寄贈
10	大室容一	しめのうち徳利 他	民俗	一括	寄贈
11	石川裕三	府中町消防団第三部団旗 大工道具(ノミ) 養蚕道具部品箱	民俗	3点 2点 1点	寄贈
12	五十嵐一郎	旧式電気炊飯器 フープロ	民俗	1点 1点	寄贈
13	小澤 健	稲荷祠 他	民俗	10点	寄贈
14	内藤 治	弘化3年銘入り穀蔵部材	民俗	1点	寄託
15	大久保宣治	論所絵図 是政八幡神社由緒	歴史	1点 1点	寄贈
16	大室容一	大室政右家文書Ⅱ	歴史	一括	寄贈
17	三輪修三	人倫訓蒙図彙	歴史	6冊	寄贈
18	田中淑雄	人見田中善太家文書Ⅲ	歴史	一括	寄贈
19	小澤 健	稲荷関係史料	歴史	5点	寄贈
20	河内辰夫	人見河内辰夫家文書	歴史	一括	寄託
21	矢島千里	矢島九兵衛家文書Ⅴ	歴史	一括	寄託
22	大室容一	大室政右氏収集柄鏡コレ クション	美術	一括	寄託
23	田中啓之	国内採集の蝶標本	自然	一括	寄贈

★「あるむぜお」は定期購読できます!★

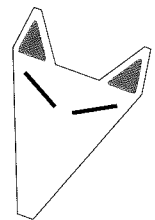
「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承ります。
4回分の送料320円(切手でも可)を添えて、受付カウンターでお申込みください。

平成21年度
利用状況

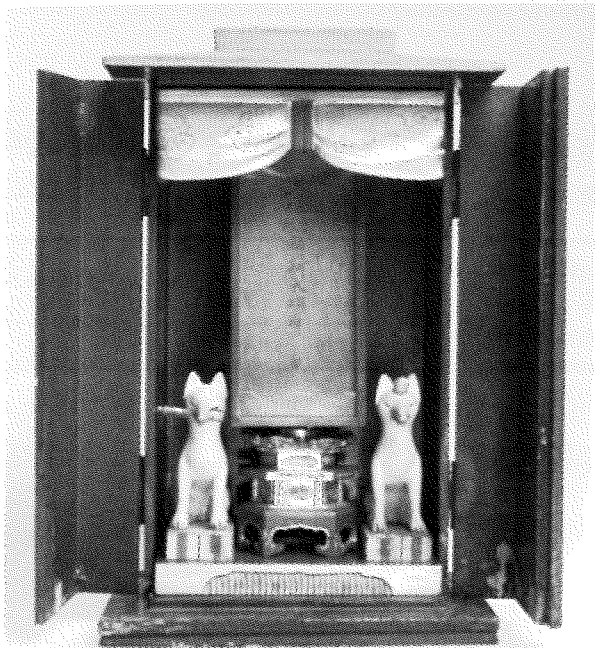
区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数307日	大人	158,599	6,274	41,811	206,684
	子供	25,286	21,347	54,116	100,749
	小計	183,885	27,621	95,927	307,433
上記のうち プナ列島観覧者 投影日数291日	大人	25,777	1,897	5,325	32,999
	子供	10,494	9,419	4,122	24,035
	小計	36,271	11,316	9,447	57,034

◆新刊案内◆

- ◆『府中市郷土の森博物館年報』23号
平成20年度の事業報告です。 300円
- ◆『府中市郷土の森博物館紀要』23号
学芸員他による研究報告・論文集です。 400円
・府中市郷土の森博物館フィールド内の野鳥相に
ついて【相馬尚教・中村武史】
・古代武蔵国府の成立【深澤靖幸】
・中世武蔵府中の誕生
文献からみた画期としての11世紀【小野一之】
・鎌倉街道上道と東国武士団【川合 康】
・幕府の政策から見た川崎平右衛門定孝の登用
将軍吉宗側近とのかかわりを通して【野田政和】
・府中の火消
江戸時代の火事と消防【花木知子】
- ◆『府中市内家分け古文書目録13 新宿築池家文書目録1』
府中市内に残る古文書の目録です。 300円
- ◆『府中市郷土の森博物館ブックレット13』
お稲荷さんの起源と歴史を探り、全国のお稲荷さん
にまつわる資料から、その多様な姿を見るとき
にも、府中市内のお稲荷さんを紹介。 700円



新刊は、本館1階ミュージアムショップにて発売中です。



妻恋稲荷より授与された稲荷祠

府中市内の家々には屋敷神が祀られている場合があります。今から約30年前に市内屋敷神調査をした結果、その大半が稲荷を祀っていることが判明しました。市内では「稲荷様」などと呼び、お祭り日とされる2月の初午（初めての午の日）には稲荷をまつる行事が行われています。「正一位稲荷大明神」と記した職を立て、油揚げ、イワシの目刺などをお供えします。今回紹介する資料は、それにまつわる二つの稲荷の祠で、あるお宅で祀られてきたものです。

上の祠は、厨子のような入れ物を開けると「正一位宝珠稲荷大明神」と記された木箱が台に乗せられており、その両脇に2匹の白いキツネ（木製）が座っています。さらに「奉再建正一位宝珠稲荷大明神」、天下泰平、五穀豊穰、国々安全などの祈願が込められた棟札が内部に入っていました。その裏面を見ると、この祠は嘉永7年（1854）に妻恋稲荷（文京区湯島鎮座の妻恋神社）よりいただいてきたことがわかります。妻恋神社は関東大震災や戦災による焼失などの変遷があり、江戸時代以前の姿が失われていますが、かつては王子稲荷（北区鎮座）と並び関東の稲荷を司る存在として知られていたところです。

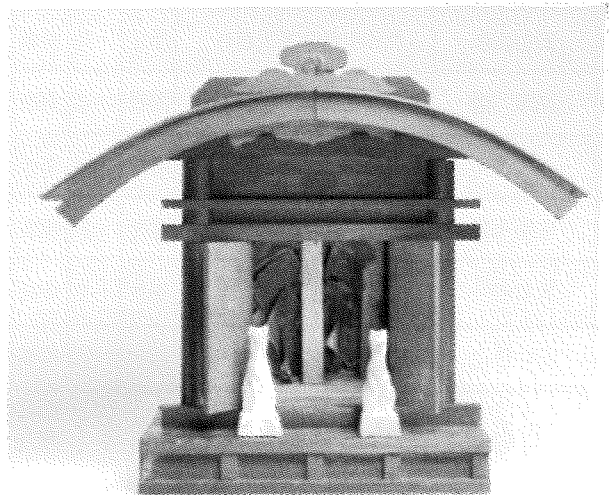
右下の祠の内部には豊川閣妙巖寺（愛知県豊

川市の通称豊川稲荷。曹洞宗寺院の稲荷として知られる）発行のお札やお守りが多数入っていました。お札類の印刷状況からして大正～昭和の頃のものと思われます。

先の屋敷神調査の結果、府中市内には稲荷の総本宮である京都・伏見稲荷大社はもちろん、妻恋稲荷や豊川稲荷のほか穴守稲荷（大田区鎮座）など有名な稲荷から勧請（分けていただくこと）されたものが多数あることが判明しています。しかしその証拠は口頭伝承以外ない場合もあり、これらの祠や内部に記された文字記録から、伝承を裏付けることができます。

しかも、一軒に一社とは限らず、複数の屋敷神を祀っている場合があることを改めて教えてください。この家では複数祀られているとは伝わっていなかったようです。かつてこの家に稲荷信仰に熱心な方がおり、いくつかの稲荷を家の神として祀っていました。しかしあるときこの二つの稲荷を含め多数あった屋敷神の祠をひとつにまとめました。そのため、これらの祠は形としては魂が別の祠に移った、いわば空き家であったわけです。しばらくそのまま同家で保管されていましたが、2010年3月に民俗資料として当館に寄贈されることになりました。これらの資料はかつての神々しい存在を語るだけでなく、家の歴史を改めて語ってくれました。言うまでもなく府中の信仰史・生活史を知る上での貴重なものといえるでしょう。

（佐藤智敬）



豊川稲荷より授与された稲荷祠